

## 十九世紀獨逸史學史の一齣：所謂「プロシヤ派」に関する一考察

讃井，鉄男

<https://doi.org/10.15017/2344414>

---

出版情報：史淵. 10, pp.143-173, 1935-03-15. 九州帝国大学法文学部  
バージョン：  
権利関係：



# 十九世紀獨逸史學史の一齣

— 所謂「プロシヤ派」に關する一考察 —

讚 井 鉄 男

(一) 政治史派の特質。

(二) ランケとドロイゼンとの比較。

(三) ドロイゼンの史觀と普獨問題。

(一)

オットー・ディーターはそのランケ、ドロイゼン比較論の冒頭に十九世紀中葉の獨逸史學の推移を次の様に述べて居る。

一八七六年ランケはその「宰相ハルデンベルグ公の回想録」を書く際に自由戰役以後に史筆を進めやうとしなかつた。それは資料の不充分さにもよるが一八十三年を以つて彼の筆を斷たしめた主要なる理由は即ち、ナポレオンの失脚以來「世界の地平線」が變化し、之と共に復舊、立憲運動の新時代の幕が開かれ、之は歴史的興味よりも寧ろ政治的興味を唆るからと言ふにある。ランケがかゝる言葉を

記した時は彼は其の純粹な學問的研究に捧げられた永き生涯の晩年にあり、その生涯の幾多の經驗により情熱的政治的時局問題への關心は絶對的認識に捧げられた史學を屢々妨げるものである事を知つたのである。故に彼はその著作に於て政治的に白熱化する十九世紀の境を敢て踏み越へやうとしなかつた。自らの政治的活動の運命、政治的に動搖せる時代が彼の歴史著述に向けた、冷遇等の凡ての事から、一八七七年二月に「歴史家は決して同時に實際的政治家であり得ない」と述べた様な確信が得られたのである。六十年代には既に新しき轉向が完成せられ自由戰役の嵐と共に始められた獨逸、歐洲の發展の時代は一八六六年、一八七七年を以て一先づ完結し、新獨逸帝國に於ては、永きに汎る紛争の後に獨逸問題の解決、十九世紀の敵視し合ふ諸勢力の妥協が達成せられ、之と共にランケの純粹歴史的思考法に新しき展望が開かれ始めた。九十年誕生記念日の演説に於てランケは述べて曰く、「獨逸建國といふ大事件の中には、『就中革命的諸力の敗北』（この勝利は歴史の公正な觀察を可能にする）が認められる。此の決定的な轉向が初めて私に「世界史」の大計畫の勇氣を興へた」と。かゝる言葉の中には亦新帝國に於ける獨逸歴史記述のとれる變遷推移の深き原因が示されてゐる。六十年代に於ける攻撃的なビスマルクのプロイセンとの衝突、獨逸の爲のヘゲモニー戰に於ける此のプロイセンの勝利、佛國との戰に於ける國民的感情の興起等は事實、本來の獨逸の十九世紀の革命的諸力、活動的な市民階級に指導された自由主義的國民的民衆の力にとつては、幸なものはなかつた。今や新興獨逸の中心に來たものは、嘗てのパウッスキルへ風な民主主義的、統一的中央權力ではなく

して、保守的地域國家プロイセンであり、舊獨逸自由主義の革命的勢力の中心は破壊せられ、其の指導的闘士等は自己の理想の迷妄を悟り、自由主義的民衆は亦内部的分裂に倒れた。獨逸の歴史記述（その代表者の大部分は此の自由主義的市民階級より出てゐる）は、今やダールマン、ゲルヴィヌス、ドロイゼン、ジーベル、トライチケの政治的國民的自由主義的要求から、次第にランケの純粹な認識目標に復歸して行つた。此の轉向と共に一八十三年—十五年、一八六六年—七一年を以て、劃せられる時代は又獨逸の歴史描寫に於ても新しき光の下に照らされるに至つたがランケのミューズ（史神）は猶もこの政治的に熱した大地を歩く事を躊躇し之に反して統一、自由の爲の情熱的な闘士等の政治史は好んで此の道を進んだ。それは此の近き過去の人物事件の中に彼等自身の政治的、國民自由主義的、確信が最もよく證明せられるからである。<sup>(1)</sup>

十九世紀獨逸史學の興隆を招來せるものは國家理想と世界觀との兩極性である。普遍的傾向のランケの史學すら個性的プロシヤ國家生活の觀照が彼に與へた思想なしには考へられない。北獨逸的、新教的史學は大獨逸的舊教的史學と等しく共に學問と政治との合生 (Symbiose) の中に生きたのである。成程、國民主義的傾向に偏せんとする所謂『政治史家』に比して、ランケの優越が認められるのであるが、彼も亦關心を持ち、彼にも亦力の泉であつた學問と政治との合生は彼には異つた性質を有した。國民政治的意欲の情熱から解放せられ、國民性（彼の解する如き）によつて充分に蘇生せしめられた國家生活の中に内的満足を見出した彼の天才は新しき理想主義的浪漫的に育まれた世界觀が、

歴史世界の理解の爲に供する様々の偉れた可能性を自由に汲み取り、das Real-Geistige を常に un-geahnter Originalität に閃めかす事が出来た。<sup>(2)</sup>

一八五六年マールブルグ大學に於ける「近代史學の狀態に就いて」と題するジーベルの演説より窺はれる様に「三月以前の精神的獨逸」風なランケの氣質が彼等のそれと相容れないものであつた事は容易に認め得るが、深く觀察する時は兩者の相違は程度の差異にすぎず學問的といふよりは寧ろ實際的政治的性質のものであつた。

智的觀察の浪漫的母地よりの漸次的離脱、政治理論より政治實踐への道に於て彼等の特質が示されるとはいへ、根強いロマンチツクの傳統なしには彼等は存在し得ない。謂はゞ彼等はロマンチツクの遺産を以てロマンチツクに反抗したのである。<sup>(4)</sup> 彼等も亦歴史法學派と等しく國民の有機的發展より理想を導き出さんと欲し、全くオルガノロジーの意味に於て目標を既に獨逸史の「本質」の中に移し、此の Zieltrieb の發展を直觀的な、經驗的材料に合致する様な發展の概念を以て描き此の場合その歴史構成が小獨逸的傾向をとるとしてもそれは單にプロシヤの黨派性に非ずして、Zieltrieb の結果を既に Ansatz の中に求める構成的有機的關聯一般への要求である。<sup>(5)</sup>

グスターフ、ウォルフ著、「獨逸史學の國民的目標」の中に指摘せられて居る様に、三月の日の近づく頃に二つの傾向が示されて居た。(一)當時の人々は政治の中に、人間社會の進歩への彼等の欲求を満足せしむる領域を見出し、その思想世界の中心としての國家は宗教、文學に對する嘗ての愛好

の念を失はしめた。(二)かゝる好尚の推移の結果は、嘗て一般的政治理論の研究のみならず、親しく國家生活に關與せんと欲した人々は、必要に迫られて、嘗て教會的、文學的問題に於けるより以上に、最も手近にある要求を考慮するに至つた。勿論その故に究極の目的を忘れ去るのではなく、之を當面の時局問題に面して、直接の考慮の後におくのである。

此の第一の現象によつては猶未だ十八世紀への橋が架けられて居る。個々の國家、國民は人類の爲に一定の文化要求を果すといふ思想は猶存在し、政治的權力は猶その存在權を文化使命の充足より得、獨逸の發展もかゝる目標に向けられねばならぬ。ゲールマン。ゲルヴィヌスの根本思想は猶屢々後に向けられて居る。然し乍ら政治的狀態が變化して初めて獨逸の文化生活は榮へるだらうといふ信念は新しい、國民的權力闘争に滿された未來を示して居る。

然し乍ら此の新しき未來は第二の現象、即ち實際的原因より要求せられた「政治的見解の *Veränderung*」により既に一八四八年以前に指示せられて居る。國民的源泉より汲み取られた新たな刺激を自ら實踐し、豊かな教育的活動の出發點となさんとする事が若き時代の人々の強き意志であつた。彼等はその道義的精神的理想に於てはゲールマン。ゲルヴィヌス。の其れと異なる所はなかつたが事實の認識、利用に於て新しきものを生み、その力を最も有効に利用し得た。

勿論最初は様々の障碍が之等若き人々の充分な活動を妨げた。即ちそれは、舊き學派に於てその半ば世界市民主義的、半ば國民的理想を學び得た人々が猶大きな勢力を維持して居り、且又若き時代の

人々の中で最も精神的に活潑な人々は當時の支配的國家權力に反抗の位置に立つて居り、何よりも先づ實際的創造の前提が戦ひとられねばならなかつた爲にその活動範圍を妨げられねばならなかつたのである。その故に彼等は必然的に屢々先づ一般的根本原理、目的（その限りに於ては舊時代の人々と一致する）を強調せざるを得ず彼等の理想の實際的完成は更に都合よき未來に延期せられねばならなかつた。

獨逸統一運動に於ける歴史家の役割、及び此の事件が獨逸史家の國民的政治的目標の發展に對する意義は上の様な事情によつて特質づけられて居る。

政治史家の運動を貫くものはその強き理想主義的精神である。彼等は哲學、詩が姿を潜めたる後の理想主義的精神の最後の代表者であつた。<sup>(7)</sup>そこには理想主義的↓現實主義的獨逸へ、精神的、文學的↓物質的、政治的關心への發展、即ち變遷、克服と見るよりは一つの *Menschentum* の主張が特質的であり、藝術。哲學より國家。歴史へと思维の對象は或は變遷したとしても、獨逸理想主義の本質は正に、それが之等の變遷に堪へ、否、之を促進し、而も世界に對する理想主義的根本關係を維持した點に存する。それは現實との鬭争に於て初めて自らを完成した。理想主義的な *Menschentum* が温健的自由主義の中に於て表現したる「全體概念」は世界の政治化、即ち學問と人生との結合、理論的人間と實踐的人間との統一であつた。<sup>(8)</sup>

政治史派の運動を通觀する時に、その風潮の一般的雰囲気より謂はゞ「時代の思想」とも言ふべき

ものゝ生れた事が窺はれる。十九世紀は美的、浪漫的、哲學的教養の代はりに、一つの新しい *sittliches Ideal* を生み、此の理想の中に人生の意義を認め、國民を歴史に導き、意志の形成を以て神聖な義務となされ、「吾等はいかの時代に對して、一つの全く新しき道義的原理を有す。『人生』(その全體性に於て實際的、政治的生活が強調せらる)は藝術以上のものであり、道義的力は美的現象以上のものであり、一定の祖國は融け去つた人道主義の像を排除し今や我等は全體に働きかける事にのみ眞の満足を見出す」。若返らされた國家生活への一般的傾向が凡てを貫く精神であり、書齋、宮廷の史學(ランケ)は蔑視せられ、事件が人心を動かし歴史的思想が偉大な事件への愛好の念に支配せられる時に、その事件の物語が興へられたスタイルとなり、新しい意味を興へられた「*Sittlich*」「*Handeln*」「*Freiheit*」等の標語、偉大な「*Persönlichkeit*」の體驗、國家的存在の價值、等の中に一つの新しい世界觀が窺はれる。此處に吾々は一つの文化哲學的業績を認める事が出来る。トライチケの如きは政治的領域をはるかに越へて道義的秩序、人類の新しい形式の爲の鬭争に迄進んだ。<sup>(9)</sup>

ランケの客觀性は個々の場合を普遍的政治、普遍的關係の光の下に置き、個々の民族、國家をそれ自らとして、なく常に民族結合、國家結合の關聯に於て觀察し、政治史家と彼とを相違せしめるものは根本的には認識への彼の強き意志、廣き認識の力であり、且又彼は彼等に比し、更に直接にロマンチックに屬し、之と共に普遍的觀察の傾向を有した事である。<sup>(10)</sup> 既に見た如くランケが獨逸建國を賞讃するのは彼が此の中に革命的、一般に政治的情熱の敗北を見たからに他ならぬ。ランケの獨逸國民感

情は、何よりも先づ精神的性質のものであり、政治的性質のものではない。それは Inspiration, Getragensein, Durchdringensein、の感情、彼の精神と國民の精神との汎神論的關係の感情である。こゝには近代國民國家の發生に大きな力をもつた主觀的要素が全く姿を隠して居る。ランケの國民概念の中には此の、國民の古代的、植物的生成の時代と並んで亦獨逸國民思想の普遍化的時代の影をも認める事が出来る。彼によると獨逸國民の偉大な政治的使命は獨逸の個々國家を出来るだけ特殊獨逸的に、又凡ゆる外的模型、理論から自由に形成するにある。全獨逸國民にとつて國民國家を要求せる人々は政治的情熱（之は靜觀的史家と相容れざるもの）に満たされねばならぬ。即ちランケは全體としては、捕はれた同時代人より更に廣く國民的國家生活を見る事が出来たが特殊的に、個々に於ては獨逸に於て文化國民の嚴密な國民國家的統一に向はんとする力を極めて過少評價したのであるが、獨逸國民感情は獨逸國民性の精神的統一の意識より、政治的表現への欲求への推移に際し、一度、幾世紀の地域國家的活動によりその特殊の政治的國民性を形成した個々國家の限界に足を踏み止めたのであり、個々國家の國民性を他の凡ての國民的價值と同様に考慮に入れなかつたならば最も根強い感情を否定する事になるだらう。此の事實を等しく表現したものはフンホルト、ビスマルクの二人であり、此の二人の間に立つものが理念と現實をよく結合し得たランケ其の人であつた。此の三者の謂はドジンフォーニツシユな關聯は、眞の理念的思惟と眞の現實的思惟とは常に一致し得る事を示し、シラーの人類國民はビスマルクの國民國家を形成する事が出来た。<sup>(11)</sup>

既に見たる如くランケと政治家の差異は程度の差異、實際的、政治的對立にすぎぬ。兩者の隔りの最も大であつたのは憲法變更の必要が政治家を舞臺に登らせ、彼等が自由主義と歩を合せた時であるが、政治家が獨逸統一は普破壊によつて、獨逸に於ける普の指導的位置によつて達せられると考へ及ぶに至り、次で實際的、政治的問題が遂に解決せられる（ランケの意味に於て、而して彼等がランケの實際的、政治的立場に近づく事により）に至つて兩者の對立は減じて行つた。<sup>12)</sup>

ランケとビスマルクの思想の多くの一致は既に人々の指摘してゐるところである。<sup>13)</sup> ビスマルクが政治家等の主張に接近したのは單にプロシヤの權力目的に利用せんとしたのであり、即ち彼は小獨逸的史家、政治家が理想として賞讃するものを實際的補助手段に利用し、彼等が單に價値ある把手と看做す目標に向つて進む。<sup>14)</sup> 然し乍ら宰相に對する鬭争の頂點は既に彼等の轉向を意味しビスマルクの強き影響の下にジーベル、トライチケ等の歴史描寫も書き變へられねばならなかつた。<sup>15)</sup>

獨逸の爲に普の國家統一を破壊せんと欲したドロイゼン。ドンカー。ダールマン。は普によつて、然し亦普を犠牲にして獨逸を統一せんとした。ランケも亦普による獨逸の統一を欲した。然し乍らそれは歴史的に生長せる國家個性を保存する事によつてである。前者は近代的な獨逸國家の理想より出發し、(歴史的地域の獨逸は尊長するが而もそれは彼等の立憲的聯邦國家の概念の許す限りに於て)ランケ以上に當時の時代の中に深く、根を下ろして居た。ランケは更に深く獨逸史の中より汲みとり、古き獨逸の保守的皇帝權、地域的時代、新しき生成する立憲的普獨を一つの統一的な少し

の間隙もない發展の系列の中に綜合せんと欲した。前者に於ては寧ろ熱き情熱、希望が見られるに對し、ランケには歴史的冥想の靜寂さと、現實政治的考慮の冷靜さとが綜合せられて居る。彼は普國家の高臺に立ち、彼等は獨逸民族の大地より躍り出んとする。普中心より獨逸問題を把握せる人は、彼等の如く情熱的に希求する事は出来ない。何となれば彼は既に何物かを有して居るに反し、彼等は何物をも有せずと信じ、國民への渴望に於て凡てを、その故にあまり多くを有せんと欲したから。然し此の何物をも有せざる人々の渴望が無かつたなら、普國家にも完全なる飽滿への衝動がなくなり、亦普は單に普たるに止まつたゞらう。彼等が共に創造に協力せる力なくしてはランケ、そして後にピスマルクは普の自己満足より脱却しやうと考へ得なかつたゞらう。彼等の準備が無かつたならば二人共非常によく見、よく建設する事が出来なかつたゞらう。<sup>(17)</sup>

## (二)

グスターフ・ドロイゼン著すところの父の傳記 (J. G. Droysen. 1910. Leip) を讀む人はドロイゼンとランケの人格、生涯に幾多の類似を見出すだらう。(一) 彼等の性格を形成する、北獨逸的新教の中に育まれた宗教的感情價値の豊かさ。(二) 文献學より歴史學への轉向。即ち古典古代の無制限な美化的讚嘆を去つて歴史の過程の全體性、繼續性、凡ての歴史現象の個有の價値、全體の因果的關聯、世界史の流の姿を認め。(三) この精神的要素と宗教的精神價値とを一つの世界觀に融合せしめ

んとして理想主義的哲學に求め、而も之に捕はれず。(四) 世界史の動きを好んで國家の頂上より眺め。(五) 國家はその原理の自律性にも拘はらず同時に、ランケが時代の指導理念、支配的傾向と呼ぶものゝ荷擔者であり、世界史的國家形成はその擴大的目的に従ふ事により文化史的使命を果す。(フリッブ。アレクサンダーの意義、Diadochen, Epigonen の業蹟に關する兩史家の把握) (六) 歴史事象の繼續性、無限に流れる流に對してさうであつた様に、政治的現在に歴史の過去の全體的生産繼續を見、過去をば政治的努力の證人とする。(七) 普國家に在する豊かな道德的エネルギー、政治的軍事的素質を尊長し、當時の國民的、統一的努力を生き〜と感じた。

以上の様な様々な類似にも拘はらず二人の史家の關係は元來互に相容れないものであつた。例へばドロイゼンの「自由戦争史講義」と、ランケの「大國論」とを對立せしめた時に、吾々はそこに著しき對立のある事を見るだらう。歐洲的勢力均衡はドロイゼンにとつては不自然な、專制主義的精神より生じたものであり、之は克服せられねばならぬものであるが、ランケにとつては書かれざる歐洲的國家憲法の自然的且つ永續的形式である。ドロイゼンによると歐洲の歴史は或る一定の國民の發展に基いてゐるに反し、ランケにとつては近代の歴史は種々の歐洲の國民のコンツェルトを意味し、その中で或る時は或る國民が他の時には他の國民が指導的であり、凡てのものゝ共鳴が初めて、その眞の内容を形成する。佛革命時代はドロイゼンにとつては近代の始まりであり、ランケには此の時代には成程從來のものゝ若返りが行はれたけれども、而も大動亂の結果は從來の秩序の『再建』であつた。

此の時代に國家と國民との關係が變遷し、國民と國家とが密接な結合をなしたといふ事は二人共認め  
るが、國民と國家との自然的關係に關する二人の相異つた見解は彼等の特質をよく示して居る。國民  
精神が國家憲法の精神を規定し、國民の本質個有の精神から國家形式は發生せねばならぬといふ事に  
ついては二人の史家の説は一致してゐるが、ドロイゼンにとつては、國民と國家とは一致すべきであ  
り、ランケにとつては一國民の土地に様々の國家形成がなされ得る。國民の概念が非合理的モメント  
を、國家の概念が合理的モメントを持つとすれば上述の二人の見解の相異の中には、ランケの史觀に  
於ては非合理的なるものが合理的なるものに勝ち、ドロイゼンは非合理的なるものゝ合理化の可能性  
をさへ考へる。即ち彼には國民國家の原理は稱呼 (Benennen) し言ひ現はす事の出来るものゝ様に  
思はれた。<sup>(18)</sup>

ドロイゼンはランケに對して二つの事、即ち倫理的意欲の缺乏、國民の偉大なる生活問題よりの逃  
避、宮廷的卑屈及び史料批判、事實調査にのみ基く研究を許す事が出来なかつた。第一の非難は實は  
ランケの天才の本質を誤解してゐるのであり、第二の非難は深き方法論の相違である。ドロイゼンは  
「Wie es eigentlich gewesen」を示やんとするランケのやり方、客觀性への努力を懷疑的に見る。此  
の懷疑は亦彼の強き倫理的意欲に相關聯するものであらねばならなかつた。彼は偉大な意志の強さの  
みを道義的價值として尊重し、把握を形成するものは意志であると考へる。歴史家の思想に於ける主  
觀的アプリアーをかく強調する事によつて（勿論主觀的氣儘さに陥らせずに）彼はランケ以上に近

代的のヒストリツクに近づいてゐる。<sup>(19)</sup>

データーは前掲論文に於てランケ、ドロイゼンを比較し來つて更に述べて曰く、「然らば何故に此の二人の史家は彼等の生成、理念、意欲に多くの共通點を持つにも拘はず而も決して内面的に互に調和せる關係に立つて居ないのか。それは究極に於ては彼等の相異なる學問的傾向によるものでもなければ、亦彼等の政治的見解の相違によるものでもない。彼等を分つものは更に深き或物である。即ちそれは前者が自己の特質に相反するものとして感じ、そして之より遠ざからんとし、後者には之に反して、彼の凡ての嗜好に合ひ、凡ての行動を決定せる一つの力強き「形成的精神要素」*Gestaltendes Seelenlement* である」となして二人の史家の根本的對立を「情熱性」の中に求めて居る。<sup>(20)</sup>

即ち、それは根本的に相違する氣質、相反する個性の結果であり、此處には *Vita activa*, *Vita contemplativa* の對立が見られる。即ち、行爲に於て初めて自ら完成すと信じ得、その故にそれが働く社會の中に自己の全人格、精神生活、國民的感情、倫理的意欲をも導き入れる人格。行爲の世界に非ずして認識の世界に適して居ると自ら感じ、而して自らの個性に於て、社會の様々の力に觸れられ、擔はれて居るとは感ずるが而も之等の力を秤り、秩序づけやうとはしない人格。此の根本的な對立の中に彼等の歴史觀の相違は基因して居る。ランケが個人的に控へ目である場合に、彼には倫理的諸力への關係は個人的生活の事項に止まり、社會の諸對立の中に認識さるべきではない。凡ての時代は等しく神に近く立ち得るものであり、彼は何物にも捕はれずに歴史生活の諸力の中には善と惡とが互に繫

ぎ合はせられ並存して居ると見る事が出来る。個人的意欲は社會に於ける行動と離さるべきでないと考えへるドロイゼンは、社會を倫理化し歴史の諸時代を命名し「評價」せねばならなかつた。<sup>(21)</sup>

ドロイゼンに依ると史家は偉大な歴史的形象、傾向の結果如何を問ふよりも、其等が一般に Fortschritt in der Entwicklung を意味するや否やを問ふべきである。没落への道も嘗てはかゝる進歩を意味し得たとさへ彼は大胆に主張する。破壊しては建設し、建設しては破壊する歴史の休む事なきダイナミックが彼の心を惹く。即ち破壊、否定の力も亦一つの力であり發展に於ける進歩を意味し、個有の力の發展に於ける凋落すらも一つの Zeit であり而も最高の Zeit である。之一つの力強き歴史的パトスであり、(彼のヘレニズム思想を理解するに注目すべき點)彼の歴史的パトスは亦彼の政治的パトスである。此處に亦我々はドロイゼンのプロシヤ的國民的著作を理解する鍵を見る。<sup>(22)</sup>

ランケの深き内面には廣く靜かに絶へず強き精神が彼の存在の大きな目標即ち純粹認識の目標に向つて流れる。かの外面的な漣は彼の神聖なヒストリーの内面的な流を決して亂す事はない。そして一度外部で嵐の様に風が吹きまはる時には彼は安全なる谷間に自己のベットを求める。ドロイゼンは之と全く異なり、彼には嵐が、激動が内面的な要求である。激動の波が彼の本質の深き所を吹き荒らし、彼の精神は妨げをなす物に反抗して泡立つ。彼にはランケの氣質の持つ如き古典的な純粹な靜けさが缺けてゐる。この根本的に相違する感覺が亦二人の史家の歴史描寫にも影響し、ドロイゼンをして「自律的思想家、詩人」の民族よりも政治的に意欲し行爲する時代の子たらしめ、古き高雅な思想

家詩人の高所にとつてはこの新しき、民衆の鈍き本能を刺激する如き、認識の静けさを擾き亂す如き力は危険なものであつた。ランケの本質の敵たる情熱こそ正にドロイゼンの精神を形成する要素であつた。かゝる感覺の内的情熱性が亦ドロイゼンをして歴史の中に於ける「前進的に推進する運動の力」に愛好を向け、休止し、妨害する力を排撃せしめた。ドロイゼンが遂に歴史事象の豊かさの中から彼にとつて究極の最高の發展段階をつくる如き現象（即ち現代の出來事、世界史の過程の最も近き生産）を選ぶに至つたのは全く彼の一貫した内的發展に相應するものである。かくて亦普獨問題に對する彼等の見解を相違せしめ、ドロイゼンが一八四八年に叫んだ有名な二つの選擇即ちプロシヤは今獨逸に *aufgehen* すべきである、さもなければ普こそ獨逸の核心たるべしとの二つの見解は夫々ドロイゼン、ランケの立場を示すものである。一方は過去を、彼の心情、存在を滿たす現代の衝動的推進的力の視點より見る結果この現在勢力の歴史的起原は不知不識に歪曲せられ、かゝる歴史像より引き出された政治的要求は相對立する勢力の歴史的權利を容易に忘れる事が出来るが、他方は此の歴史的權利を強調し政治的情熱に曇らされない眼は互に争ふ時代勢力の力を正しく評價し豫言的な未來像に結びつける事が出來た。實に情熱性の存在の如何こそ十九世紀獨逸史學史に於ける彼等の地位を決定したと言はなければならない。

然し乍らランケの政治的情熱性を否定し、彼を獨逸十八世紀の純粹な「自律的」*autonomer* 思想家詩人の主知的精神生活に根ざすものとなし、之に對して主意的な絶對的政治的意欲及び民衆、行爲人

の情熱的衝動の十九世紀を對立せしめる、(Diether, Ranke als Politiker, 1911) 事はマイネツケの指摘する如く (Zur Beurteilung Rankes) 誇張に過ぎる。政治的無情熱性、純粹の「自律的」認識慾は獨逸十八世紀からのみ説明せらるべきではない。Vita contemplativa, Vita activa の對立は人間の精神様式の、時代を超越した對立であり、「ルネッサンス人」がいつの世にもある様に、ランケ的人格はいつの時代にもあり得ると云はねばならぬ。<sup>(23)</sup>

## (III)

F, Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat により、かの獨逸發展の目標としてホーヘンツォレルンの國民的王朝は認めるが普國家のヘゲモニーは全て之を排斥し、普國家の解消を以てホーヘンツォレルンへの帝冠捧呈の條件となさんとする思潮の意義が明らかにせられた。マイネツケも指摘せる如く普の獨逸使命の爲の最も舊く最も情熱的な闘士であり、普政策史の古典的描寫家たるドロイゼンも亦一八四八年に普に Aufgehen in Deutschland の要求をなした一人であつた。

吾々はドロイゼンの歴史構造を知る。彼の多才な、ヘーゲルによつて訓練せられたディアレクテツクは、好んで事物を角に立て、發展の Entweder-oder を間一髪に算へる。然し乍ら之を驅り立て、事物の進行を息もつかせぬ緊張さを以て追ひ行くものは心情と情熱とである。普が獨逸に Aufgehen する事は彼にとつては一つの Seelenroman であり、同時に論理的なる過程である。普は何等の憲法

をも必要とせず。唯、Provinzialstände 或はせしめず Vereinigte Landtag を有すれば足る。かくする事によつて普は獨逸に親しくなり、あたかも靈が他の靈の中に入つて行く様に獨逸の憲法の中に入つて行く事が出来るであらう。若しも之が失敗せる時は役割は逆になる。即ち普よりも他の獨逸が犠牲を供し、普の憲法が獨逸人の核心をなすに至るだらう。<sup>(24)</sup>

右の如きマイネツケの巧みな形容の言葉は、政治史派の典型的な代表としてのドロイゼンの態度を最もよく表現して居り、次に私がドロイゼン換言すれば政治史派の革命時代を轉期としての内面的思想的推移を語らんとする考察の端緒をなすものである。

一八四八年四月 17er Ausschuss に於けるドロイゼンの政治的活動は彼が後に公表せる Beiträge zur neuesten deutschen Geschichte, 1849. に詳細に記載せられてゐるが、之は史料批判的研究の結果<sup>(25)</sup>一八四八年四月に彼が記した記録、動議を後に改作、修正して公表せるものである事が明らかにせられた。

我々はかゝる Beiträge の修正、改作の事實の中に史家ドロイゼンの心理の興味ある反映を見るのである。之即ち後にビスマルクの勝利と共に政治史家がビスマルクの力強き影響の下に彼等の政治的信念はもとより過去の描寫の姿までも修正せしめられるに至つたのと軌を一にする。ドロイゼンは一八四九年秋以後に Beiträge 公表に際し革命運動初期に於ける自己の政治的理想主義的性質を抹殺し、その代はりに das Machtpolitische, 又は普墺の對立と言ふ事を強調せざるを得なかつた。かくて彼は

革命運動の經過の中に於て初めて達し得た經驗を既に四月の事件の批判の中に迄混入せしめる結果になつたのである。

マイネツケは十九世紀に於ける普獨關係を述べて曰く、<sup>(25)</sup>「その中に二強國を含む聯邦國家は不可能であるとしたら、その中に一強國を含む聯邦國家は可能であるか。それは他の聯邦構成國と非普的獨逸とが此の最強國に壓倒せらるゝ事なしに可能であるか。かゝる不安なる問を非普的獨逸が普に向つて發する時に普は次の問を以て之に答へる。然らば人は普に對して公正であらんとするか。普が自己の歴史的個性と國家個性とを保存せんとする主張を人は尊重するや否や。此の問と反問との間を十九世紀普獨統一運動が動いて行つた。」と。

既に Paul Pizer はその Briefwechsel Zweier Deutschen, 1831. に於て普獨統一問題のディレンマを鋭く指摘してゐる。即ち彼は普獨融合の保證たるべき普の立憲化に伴ふ普の獨逸に對する完結（閉鎖）のディレンマを見出したのである。彼はフッドリツヒ大王の鷲に呼びかけ、見捨られし者故國を持たざる者をその黄金の翼もて被はん事を求むるが、彼が腕を差し押ばすのは最強國家（普）に非ずして此の國の支配者である。彼も亦ゲーテの様にプロシヤ的であるよりは寧ろフリッツ的であり、ホーヘンツォレルンの國民的王朝の爲に戦ふけれども普國家のヘゲモニーの爲には戦はない。かゝる思想の根源地はフィッサー。ガーゲルン。リュウメリン等を生める西南獨逸の特殊の政治的狀態の中に求むべく、即ち偉大な歴史的現象とそれを生める國土とを、ホーヘンツォレルン王朝とその母地とを、

即ち分つべからざるものを分離し普を不自然な國家として解消せんと考へる。<sup>(27)</sup>

フリックス・ギルベルトはその著「ドロイゼンと普獨問題」の中に述べて曰く、「然し正にかゝる關係より彼の國民國家思想が猶如何に超國家的思想過程に捕はれてゐるか判る。普遍的人類發展の目標として初めて獨逸國家は正當さを得て來る。(中略)然し此の普遍的思想過程の中にフィッパから得た地方議會に關する見解、及び四八年革命の時迄彼の政治思想を規定するプロシヤ解消の思想の出發點は求めらるべきであり、ドロイゼンにもプロシヤ理念が彼の政治思想の中心を占め、之は當時の普の現象とは一致せざるものであり此の理念の實現は彼には道義的義務であるのみならず就中歴史的必然性を意味した。然し正にかゝる歴史觀により彼は普と獨逸との關係の中に生きたる國家個性の鬭争を見ずして、精神的理念の鬭争を見る。普を本來の獨逸に解消する事は此の意味に於て決して犠牲に非ずして普理念の實現である。<sup>(28)</sup>」

我々が一八四〇年代に於けるドロイゼンの政治思想を見る場合には次の事を顧ねばならぬ。即ちドロイゼンの歴史論的思想世界の完結の中に、此の體系の結果を政治生活に適用するといふ必然性が存した。故に政治問題の出現は彼の從來の思想の延長建設を意味する。従つて四〇年代の政治事件も彼にとつては屢々彼が自己の體系を適用する材料にすぎず。彼の書簡、論文、自由戰役史等の色々の政治的觀察は一つの統一的なる政治的思想世界の一環、一つの歴史的的政治的體系の部分の様に考へられる。かく事實を一つの體系に從屬せしむる事はドロイゼンが彼の時代の政治思想と密接な關係にある

事を物語る。かゝる傾向はグールマン、ドンカーその他當時一般の風潮であり「Denken im System」が尊重せられた。精神的に見るとこの點にドロイゼンが理想主義的體系哲學者との接觸示され、且又かゝる觀察の仕方には人生よりも理性、思惟を尊重する時代の風潮が窺はれる。<sup>(29)</sup>

マイネツケがドロイゼンの自由戰役史に關して述べて居る様に、ドロイゼンはキリスト教に目的論的に集中せしむる事によつて古代史を構成したが此處でも亦近代國家の發展を目的論的に構成して居る。經驗的になれる彼は猶もヘーゲルを忘れ去る事が出来なかつた。<sup>(30)</sup>

ドロイゼンは一八四五年發表した「普の政治的位置」と題する論文の中で「普國家程注目すべき政治形態はない。その中には相戰ふ二性質が含まれてゐる。あまり微細な區別になるかもしれないが人は Staat への Macht への概念を對立させねばならぬ。故に普は Staat か Macht か、deutsch か europäisch か Staatsbürgertum か dynastisch かの何れかた然とする間を動搖した。」云々。と述べてゐるが、<sup>(31)</sup>こゝには deutsch, europäisch が對立せしめられ deutsch は Staat, Staatsbürgertum と同一視せられてゐる。彼が Staat と Macht とを對立せしめて居るのは此の他色々の場所に見られる。國家が自己主張を目的とする限りに於て Macht と呼ばれ國家の形態を道義的内容を以て満し得る時に Staat と呼ばれる。かく Staat, Macht を區別する事は彼の思想全體を一貫した概念であり、彼の國家理想の超國家的モチーフが窺はれる。かく二つを對立せしめる事には就中精神的なものから政治的なものへ進む時代の思想が示され、倫理的生命の場所として初めて政治的社會は正しとせられ其等の

自然的條件は無視せられてゐる。

マイネツケも指摘してゐる様に、<sup>33)</sup>「かく分つべからざるものを分たんとした點に彼の國家理想の超國家的モーフが見られるが、然し同時に亦彼は復古時代に於ける歐洲的、普遍的利害によるプロシヤの國家個性の束縛を觀察してゐる事を示す。我々は彼の思想の中にフィヒテの其の如く二つの問題の内の接觸を明らかに認める事が出来る。ドロイゼンは普の *das europäisch-universale Fesselung* を非難し、*das deutsch-nationale Fesselung* を要求する。deutsch-nationale Fesselung は彼にとつては *Fesselung* に非ずして寧ろ普の國家個性の最も内的な *Lebensautonomie* に合致するものである。普は Staat たらんと欲すれば、即ち生き〜とした *Staatsbürgertum* に發展せんが爲には獨逸と全く一致せねばならぬ。即ち『in den deutschen Namen aufgehen,』『das exklusive Preussentum in den deutschen Namen untergehen』すべきである。」

三月事件の最も大きな結果は普獨の從來の障壁が著しく縮められ普の自我意識が減じた事であつた。然し普が立憲主義に移る事により普獨の國民的融合の大きな障壁は減じたが同時に又新たな更に複雑な障壁が生れた。普は獨と内的に協和し之を指導するためには立憲的にならねばならぬ。然し同時に普の立憲的特殊生活により他の獨逸に對し障壁を立てる事になる。こゝには亦フィツアーのジレンマが現はれた。一八四八年二月、三月に西南獨逸の國民運動の指導者達も既に此の困難を了解し援助を求むる心、希望、強要等の混じた感情を以て眼を普に向けたのである。

ドロイゼンが同年四月二十九日アルニムに宛てた建白書の末尾は彼が普獨問題に關し從來の見解を固執せる事を示して居る。<sup>(34)</sup>

初めてドロイゼンは *Aufgehen Preussens in Deutschland* の思想を詳細なプランに作りあげた。  
*17er Vertrauensmänner* の憲法論議が此のヘーゲル哲學の精神から生じ彼が歴史政治的體系の結果として發展せしめた思想説述の機會を與へたのである。

同憲法案の規定が同様な精神から出發し、又當時の西南獨逸の國民的政治家の *die Deutsche Zeitungs* 紙上のシュトゥクマルの論等も同じ様な結論に達してゐる。ドロイゼン及びバウルスキルへの多數を一八四八年十一月末迄支配した普は獨逸に従ふべしといふ此の原理は謂はゞ *do ut des Politik* とも稱し得らるゝものである。ルードルフ・ハイムは述べて曰く「普が共通の獨逸利害に歸依する事は當座の犠牲の代はりに後の承認を、當座の自己忘却の代はりに將來の權力、名譽を交換する最も確實なる道である。此の偉大な歸依、寛大、信頼の政策は合目的であるのみならず、より高き立場より見れば必須である様に見へる。之を行はねば、而して歴史的運動に於て指導的支配的なる此の思想に反對する事は危険であるに相違なし。」<sup>(35)</sup>

國民議會開會（五月十八日）以後秋迄は四月、五月に論ぜられた普解消の思想は影を潜め中央權力問題が中心となつた。*Reichsministerium* 任命に關する普との折衝に際し *Aufgehen Preussens* に關するドロイゼンの期待（七月十二日書簡）<sup>(36)</sup> はカンブハウゼンの就任拒否により失敗に歸し、且又普に

於ては七月後半に普的自我意識著しく高潮せられ盛夏より秋にかけて普破壊、分割の思想に反抗し八月十二日のガーゲルンの伯林遊説も効を奏せず。かゝる状態に對しドロイゼンの受けたる印象はその日記に記されてゐる様に「普の國民意識強固となり、フランクフルトは殆んど救ひ難く殆んど絶望であつた。」(八月六日記)同八月十日書簡には「(中略)此の三週間には信じ難き程の變化あり die Idee des Reiches はもはや救ひ難く責は普にあり、普の如き國家は破壊するか破壊せらるゝか、喰ひ盡すか喰ひ盡さるゝかである。云々」と語られて居る。

ドロイゼンの政治思想は一つの大きな轉機に直面した。普の獨立意識の下に彼には普國家には、それ自らの生存可能性内在す、普は自己自らに立ち得るとの考が得られた。即ち普思想と獨思想とは最早一致すべからず普は獨逸目的に従はずとも自ら發展し得る。かゝる解決の二途の中新に感じられた Alternative は未だ彼の明瞭な自覺に迄達しなかつたとはいへ、此處に彼の思想の絶對的妥當性が現實に觸れて動搖し初めたのが見られる。<sup>(36)</sup>

此の普的自我意識は政治的空氣を再び清め、Erdkaiserlichen の思想を集中せしめ、フランクフルトの憲法事業を促せるものであつた。マルメア休戦はフランクフルト議會史に一期を劃するものである。當時十月一日ドロイゼンの思想と同じ様な思想をグスタフ・リューメリンが Schwäbische Merkur に書き送つた。<sup>(37)</sup>丁度その頃普には新に革命の氣運生じ伯林議會と普國王との争により普獨問題は新局面に入り、ルードルフ・ハイムが「吾人の利益とするところは普國王がフランクフルト議會

の援助なしには獨力にては勝ち得ずといふ事である。吾々なき勝利は鈍劍の勝利となるだらう。吾々の支持は國王に道德的援助を興へる事であり、王の行動より反動の香を取り去り國王を感謝に義務づけ、(中略)その時は獨逸の本質と普的本質との間には斷ち難き結紐が結ばれるに至るだらう。之を人間的には感謝の結紐、政治的には必要な關係の結紐と呼ぶ。<sup>(40)</sup>と述べて居る様な形勢となつた。

かくて再びかの思想が意義を得始め、十一月八日書簡に<sup>(41)</sup>「フランクフルトは間もなく普の唯一の救となるだらうといふ事は私には全く確である。」然し乍ら十一月二十四日書簡の言葉は彼が革命的運動を極めて重視して居るが又一方此の打算は正しいか否かに疑問が投げられて居る。

かの十一月二十五日のガーゲルンの伯林遊説は欽定憲法の非自由主義的性質を止め國王に帝冠を捧げんとする目的と並んで普の立憲的特殊化を阻止せんとするにあつた。之を形容すれば正に獨が普の國家個性の放棄を説きしもの普は獨の *Ver sacrum* であつた。<sup>(42)</sup>

十一月二十七日書簡に<sup>(44)</sup>ドロイゼンは「(中略)此の美しき伯林は裂かれたる絨緞の様である。賤民。惡臭。破廉恥。娼婦。禮儀正しき人の顔には皆、憂愁。倦怠。……而も我等は不合理に抗し道德的勝利を得た。云々」と述べ遂に十二月五日憲法欽定の報を得るや分裂せる感情を日記に記して曰く、「*Seltame Stimmung, ablehnend, und doch erscheint sie sehr liberal. Das heisst man Finten durchhauen.*」<sup>(45)</sup>(十一月七日記)

伯林遊説は失敗に終り、十二月五日の普の欽定憲法發布により疑もなく伯林とフランクフルト、獨逸と普との間の楔は抜かれ、ドロイゼン。シュトゥックマール。リューメリン。ガーゲルンの考とは全く反對に普が緊密な國家個性に止まらんとした事はフランクフルトの事業の最初の辛き、恐らく救ひ難き傷手を與へた。<sup>(43)</sup>

ドロイゼンの從來の政治的見解によると、普の立憲化は獨逸統一を不可能にし普の將來可能性の終局を意味した。然し彼は普が革命運動の際に示せる生命力は彼の普國家本質論に矛盾せる事を認めざるを得ざるに至り、七月の普の自我意識の最初の發現に際して示された變化が今や普の立憲化と共に明白に現はれ來つた。

十二月二日の書簡は彼の革命以前の考へ方に對する自己批判である。「(中略)一つの原理を *verwirklichen* する事は之を *geltend machen* する事に比し如何に容易なる事か、政治即ち可能なるものゝ學に於ては *das Beste* は有害であり *das Gute, das Leidliche* のみ價値を有すと知り得て私は驚く。我等の得た教訓は如何に教ふる所大なるか。唯學ぶ事にも一つの力、自己否定、眞理性含まる。云々」<sup>(48)</sup> クリスマスの頃の覺書は彼の從來の根本思想の大きな修正を意味する。曰く「吾等は幾らかの獨逸政治をつくり、之と共に一八十五年のペンタルキー制度を破り得るとの誇らかな希望を以て初めた。……現實は議會的な豫想に應じなかつた。……ラデツキーの勝利と共に壞は歐洲的強國として建直されむとしてゐる。……獨逸にとつては重大な出來事である。……然るに獨逸の未來に關する問題は單

なる一つの Alternative となつた。何となればその時迄獨逸の運命はフランクフルトにその理想的重心を有したから。その時普國王は民主的憲法を與へた。之は頗る大膽なクーデタである。之と共に普は從來よりも更に鋭く斷乎として獨逸發展の先驅に立ちて埒に對抗の地位に立つた。(中略)實際的な英國人は吾々よりもよく古のギリシアの格言 *Geld ist der Mann* を識る。同様に *Macht ist der Staat* を吾々は理解するよりは疑ふ様に見へる。若しも吾々にして吾々の *Reich* を *Macht* に高むる事を知らずば凡ゆる根本的法規、憲法形式を以て如何せん。實に *Macht* が、そして *Macht* のみが問題である。之なくしては自由と雖も價値なし。」

之等の言葉より窺はれる事は即ち倫理的根柢觀照から *Macht, Staat* を對立せしめたドロイゼンは今や國家は何よりも *Macht* たるべしと叫んでゐる。一八四八年の混亂に於て新たな歴史的的政治的見解が生れた。然しこの變遷は謂はゞこゝに初めて表現せられた思想(立憲的に完結せる普も亦獨逸の後楯となり得る)と密接な關係にある。凡ての國家は同様な自然的基礎に立ち質的には區別せられずといふ認識に達せる時に初めて普思想を獨逸思想に從屬せしめる事が最早必要となつた。そして今や彼には獨逸問題にとつては獨逸中心からの解決と普中心からの解決があると *Sû Alternative* が表現される事が出來た。<sup>49)</sup>

然し乍ら彼は普政府にとつては普中心よりの解決のみが問題となり得るといふ事を今も猶疑はんとするだらうか。彼には今やパウルスキルへの使命は唯々普政府に斷乎たる獨逸政策のための權源を與

へる事にのみ存する。(一八四九年一月三日書簡参照)<sup>(50)</sup>

一八四八年十二月以後は彼にはもはや破壊の思想は表現せられてゐない。(之以後に於ける此の思想發展に關しては Meinecke, Weltbürgertum u s w II kap V 参照)

一八四九年夏にドロイゼンは Preussen und das System der Grossmächte と云ふ小著の中にフランクフルトの體驗の凡ての結果を纏めてゐる。此の中に示されて居る思想は普墺問題に關する彼の思想の完結を示せるものであり、此處には從來内政的に向けられた彼の觀察が外政的に向けられ理念政治から權力政治への發展が示され一般に二月革命が獨逸の政治思想に及ぼせる影響の顯著な記録の一つであり後にビスマルクの賞讃を博せるものである。

彼によるとパウルスキルへの政治問題は「フランクフルトよりウィーン、ベルリンを釣上る事であつた。」「現實は理想に、利害は抽象に打勝ち人々の眼は醒まされた。」「獨逸の統一は自由からも國民的決議からも作られず權力に對しては權力が必要である。」「かくて獨逸史は權力の争となり獨逸の發展は普墺の對立の決定によつて規定される。」

かゝる獨逸史の把握の新しい點は即ち獨逸問題の解決は彼にとつては、Problem der Ponderation 即ち外政の問題となつた點である。ドロイゼンにとつては嘗ての外政と内政との統一が破壞せられ、Macht の概念が Staat の概念に取り入れられて以來、彼には權力基礎の確保が凡ゆる政治の前提となつた。今や普の權力確立が自明的に獨逸の利害と一致するものであると考へらるゝに至り、嘗て彼

は普は獨逸使命に従ふべしと要求したが今や普の立てる目標は獨逸目標であり他の獨逸は之に従ふべきである。かく普の権力政治と普の獨逸使命を同一視する事が一八四八年の結果であり、かゝる見解により彼は既に早くビスマルクの偉大さを認識せる少數の自由主義者の一人であり、かゝる見解により初めて「プロシヤ政策史」を書く事が可能であり、かく普の権力發展と「獨逸政策の再始」とを同一視する事によつて初めて普史は一つの生きた統一となつた。

然し乍ら最後に吾々は猶次の事をも願ねばならない。即ちドロイゼンがその「プロシヤ政策史」に於て獨逸國民的理念の支配を理想化せんとした時には彼が一八四八年普解消を要求せる際に「故意」に普の國家個性の自律性に違犯せんとしたに對し今度は「不知不識に」之に違犯した。彼は今度は謂はゞそれを精神的に、そして彼自らの感情の要求に従つて解消し、普が既に過去に於て道徳的に或程度に獨逸に *aufgehen* せる事を學問の手段によつて實證せんとした。故に彼の歴史觀には一八四八年の彼の政治が姿を變へて現はれてゐる。<sup>(62)</sup>

ヘレニスム時代を描く場合に彼の基督教的テレオロギーは對象の特質を把握する障礙とはならず啓示せられたキリスト教の高所よりそれに先だつ地上的時代を客觀的な冷靜さを以て觀察し得たが彼の政治的テレオロギーは別だつた。初めて實現せらるべき普獨國民國家の理想は彼の歴史觀察の中に強き主觀的意欲を導き入れた。<sup>(63)</sup> 彼のボルッッシユな立場は明らかに見れば本來的に非ボルッッシユであり少くとも超ボルッッシユであり、彼の代表する「政治史」は頗る非政治的な側面をもつ。此處に嚴

密に政治的ならんと欲した歴史家の思想世界の中に十八世紀の非政治的な思想の力強い影響を見る。<sup>54)</sup>

(終)

- 1) Otto Diether, Ranke und Droysen. Eine Parallele. Preuss. Jahrb, 142, 1910, SS. 1—3.
- 2) F. Meinecke, J. G. Droysen. Sein Briefwechsel und seine Geschichtsschreibung. Hist. Zeitsch. 141. 1930. S. 249.
- 3) E. Rothacker, Einleitung in die Geisteswissenschaften. S. 167.
- 4) G. v. Below, Deutsche Geschichtsschreibung. S. 44.
- 5) T. Troeltsch, Der Historismus und seine Probleme. S. 304.
- 6) G. Wolf, Nationale Ziele der deutschen Geschichtsschreibung. SS. 91—93.
- 7) E. Rothacker, a. a. O. S. 179.
- 8) O. Westphal, Welt- und Staatsauffassung des deutschen Liberalismus. SS. 196—202.
- 9) E. Rothacker, a. a. O. SS. 179—183.
- 10) G. v. Below, Das Gute Recht der Politischen Historiker. Preuss. Jahrb 193. 1923 S. 284.
- 11) F. Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat. SS. 289—308.
- 12) Below, Deut Geschichtsschreibung. SS. 56—57.
- 13) M. Lenz, Kleine hist Schrif. SS. 383—409. Meinecke, a. a. O. SS. 287—328.
- 14) Wolf, a. a. O. S. 137.
- 15) Lenz, a. a. O. S. 387.
- 16) G. Wolf, a. a. O. S. 136 ff.
- 17) Meinecke, Weltbürgertum u. s. w. SS. 461—463.
- 18) Felix Gilbert, J. G. Droysen und die Preussisch-deutsche Frage. Beiheft 20 der Hist. Zeitsch. SS. 75—76.

- 19.) Meinecke, Droysen. Sein Brief u seine Geschichtsch. H. Z. 141. S. 283.
- 20.) Diether, Ranke und Droysen. Eine Parallele. S. 11.
- 21.) F. Gilbert, a. a. O. SS. 75—76.
- 22.) Meinecke, Droysen. Sein Brief u. s. w. S. 258. S. 284.
- 23.) Meinecke, Zur Beurteilung Rankes. (Preussen und Deutschland im 19 Jahrhundert. SS. 361 ff.)
- 24.) Meinecke, Weltbürgertum, S. 367.
- 25.) F. Gilbert, J. G. Droysen und die Preussisch-deutsche Frage, SS. 131—148. Exkurs über die Bearbeitung der „Beiträge zur neuesten deutschen Geschichte.“
- 26.) Meinecke, Preussen und Deutschland im 19 Jahrhundert, S. 4.
- 27.) Meinecke, Weltbürgertum, SS. 339—340. S. 487.
- 28.) F. Gilbert, a. a. O. S. 35.
- 29.) Gilbert, a. a. O. SS. 53—54.
- 30.) Meinecke, Droysen. Sein Briefwechsel und seine Geschichtschreibung. H. Z. 141. S. 269.
- 31.) J. G. Droysen. Politische Schriften. herausg v F. Gilbert. 1933. SS. 30—42.
- 32.) Droysen. Briefwechsel. herausg v R. Hübner 1929. 1 S. 299. Polit Schrift SS. 68—69. etc.
- 33.) Meinecke, Weltbürgertum, SS. 364—365.
- 34.) Droysen. Polit Schrift SS. 121—136.
- 35.) F. Gilbert a. a. O. S. 88.
- 36.) Briefwechsel I. SS. 442—446.
- 37.) Briefwechsel. I. S. 459.
- 38.) Gilbert, a. a. O. S. 102.
- 39.) Meinecke, Weltbürgertum. S. 386.
- 40.) Meinecke, a. a. O. SS. 393—394.

- 41.) Briefwechsel I. S. 474.
- 42.) Briefwechsel I. S. 478.
- 43.) Meinecke, a. a. O. SS. 406—407.
- 44.) Briefwechsel I. S. 482.
- 45.) Meinecke, a. a. O. S. 412. Gilbert, a. a. O. S. 114.
- 46.) Meinecke, a. a. O. 413.
- 47.) Briefwechsel I. S. 483.
- 48.) Polit. Schrift. SS. 178—185.
- 49.) Gilbert, a. a. O. SS. 115—116.
- 50.) Briefwechsel I. S. 505.
- 51.) Polit. Schrift. SS. 212—230.
- 52.) Meinecke, a. a. O. SS. 463—464.
- 53.) Meinecke, Droysen. Sein Brief u s Geschichtsch. H. Z. 141 S. 273.
- 54.) Meinecke, Weltbürgertum. S. 464.